

食虫植物栽培のすすめ

東京都 小 宮 定 志

食虫植物の栽培法について書くようにとのことですが、既にいくつかの成書^(注)も出版されておりますので、ここでは、北海道に自生する種類と北海道に適した作り易い種類に限定して記してみたいと思います。

一般的に、植物を上手に栽培するためにはその植物の自生地での生活の様子をよく観察し、なるべくその様子に近い方法で栽培するのが最も安全で理想的な栽培法と申せましょう。しかし、自生地とは全く環境の違う都会の中で身近に栽培してみたいのも人情です。そのためには人為的な環境造りと新しい栽培法を工夫しなければなりません。熱帯性のウツボカズラ属などは、どうしても加温温室の中でなければ生育させることができません。

しかし、元来熱帯性の植物であるミミカキグサ類は、1年草として取扱うことで北海道でも充分栽培が可能です。近年、外山雅寛氏によって北海道に自生することが再確認されましたが、本州とは多少生態が異なるようであるものの、種子による越冬で生存し続けていた訳です。このように、植物の種類によっては本来の自生環境とは可成り違った地域でも人為的な手助けをすることによって馴化させ、栽培可能なものも多くある筈です。それぞれ栽培者の庭の環境をうまく生かした自己流の栽培方法を工夫し、植物の性質にうまく合致させるべく努力することが、すべての植物栽培に当ては

まる鉄則と考えております。

(1) モウセンゴケ類の栽培

北海道には、モウセンゴケ、ナガバノモウセンゴケ、サジバノモウセンゴケ(前2者の自然交配種)の3種が自生します。いずれも、いわゆる寒地性の植物で、冬芽をつくって越冬する多年草です。高性草本の侵入不可能なミズゴケを主とする湿原に自生し、十分な日照を受けて純群落を形成します。ただし、モウセンゴケは九州(屋久島が南限)まで分布しており、赤土の草地にも生育します。多少小型となり地面にロゼット状に葉を展開する形状を示しますが北海道のミズゴケ湿原では大型となり葉柄が傾上します。

食虫植物栽培の第一歩としてモウセンゴケの栽培をお勧めするのは、一般の園芸植物の栽培法とは全く概念を変えて対処していただかなければならないからです。湿生植物の取扱いに馴れていただくことが肝要です。

素焼鉢にミズゴケでゆるく植え込み(荒い砂や鹿沼土を混ぜてもよい)、充分よく日光に当て、しかも、乾かしてはいけません。水を幾回もたっぷり与えます。水を絶さぬために、鉢ごと1~2cmの深さに水を張った浅い皿やバットに並べ、いわゆる腰水栽培をします(図1)。しかし、水が溜ったままですと根腐れし易くなりますの

で、水を常に新鮮で清潔な状態に維持しなければなりません。また、ミズゴケも腐敗したり劣化しますので、頃合いをみて新しいミズゴケで植替えます(図1)。このあたりのコツが把握できるようになれば、他の多くの食虫植物の栽培もずっと楽になります。ナガバノモウセンゴケは涼しい北海道でつくり易いようです。

肥料はほとんど不必要ですが、ごくうすい液肥(ハイポネックス千倍液など)を春と秋に1、2回やれば充分です。繁殖は種子によるほか、株分け、根伏せ、葉挿しなどの栄養体繁殖で早く多くの個体に殖やすことができます。

冬芽をつくらないコモウセンゴケ、ナガバノイシモチソウ、イシモチソウ(地下に塊茎をつくる)が関東以西に分布します。ナガバノイシモチソウは日本では一年草ですから、北海道でも栽培できますが、他の2種は温室内でないと越冬はできません。また、モウセンゴケの魅力は粘液を出す腺毛にありますので、空中湿度を高く保つ必要がありますし、風を避げるためにもフレームに入れるのが望まれます。すのこの下にサーモスタット付きヒーターを設置できれば簡易温室にもなります(図2)。

(2) ミミカキグサ類の栽培

北海道にもムラサキミミカキグサ、ホザキノミミカキグサの自生が再確認されています(黄花を咲かせるミミカキグサは青森県が北限です)。日本の夏はまさしく熱帯の気候ですから、生育の早いミミカキグサ類が十分に増殖できるわけです。開花、結

実性もよいので、種子による越冬が容易です。

植物体の大部分(花茎と葉を除く)が地中であって水に浸った状態で生活します。従って、モウセンゴケよりも多湿にして栽培しなければなりません。浅い平鉢に死んだミズゴケ(できれば細かく刻んで)またはピート土を敷いて、その上に土ごと採取したものを並べてのせます。鉢を腰水にしますが、鉢が沈むくらいの水深にします(図3)。または、底に穴のない水鉢やプラスチック容器などに植えてもよいでしょう。こうして、なるべくよく日光の当る所に置きます。温室内で栽培すれば、可成り長期間開花を楽しむことができます。熱帯産のミミカキグサ類も多種類が輸入され栽培されており、大型の美しい花を年間楽しむこともできます。

(3) タヌキモ類の栽培

水面下に浮遊するタヌキモ、浅い水底に沈んで生育するコタヌキモ(ヤチコタヌキモを含む)、ヒメタヌキモが北海道に分布します。沈水生のものは、浅鉢が沈むくらいの水深にして、ミミカキグサと同じ要領で栽培できます。浮遊生のタヌキモを栽培するには、水槽か水鉢を用意します。水深が10cmくらいになるよう底に土を埋め、底土を安定させるためにハナショウブなどの抽水植物を植え込みます(図4)。いきなりタヌキモを放流せずに、1ヶ月くらい日光によく当ててアク流しをし、水質を整えてから使用します。タヌキモは水質の変化に敏感ですので、仲々水に馴めないもので

すが、一度慣れてしまうと、あとは放置したままでもぐんぐん栄養体繁殖を続けます。水質がアルカリ性に片寄りますとアオミドロ類が発生しやすくなりますので、まめに除去するよう心掛けます。いずれの種も冬芽をつくって越冬しますから、容器が凍結して破損しないよう注意さえすれば、戸外に置いたままでかまいません。ムジナモもほぼ同じ要領で栽培できます（水質管理が多少難しい）。

(4) ムシトリスミレの栽培

本州では中部山岳地帯以北の亜高山帯に自生しますが（例外的に、四国の石立山とか新潟県早出峡の標高200mの自生地もある）、北海道では夕張岳と周辺の日高山系にしか分布しておりません。いわゆる高山植物の代表的な一つとされています。石灰岩などの傾斜地に生えることが多いのですが、池沼の岸边や平地にも生育がみられます。むしろ、岩上のものより地面に生えるものの方が丈夫で大型に育ちます。高山帯に生育する株の栽培は困難で、低地に生育する株の方が耐暑性があるため栽培は容易です。勿も、北海道でしたらいずれの株もよくできそうです。

地面にロゼット状に展開した葉は極めて軟質で脆いので、移植する際は周辺の土ごと掘り上げます。土をふり落してしまわずと、葉は反転して植替えが大変難しくなります。ミズゴケ単用またはイワヒバの根やピートを混ぜて水保ちよく、しかも排水のよいコンポストを工夫して、平鉢に植えます。夏は涼しい日陰に置き、朝夕たっぶ

り灌水して根部を冷やしてやります。秋の初めにごくうすい液肥（ハイポネックス千倍液など）を2、3回与えて、よく肥えた冬芽をつくらせます。冬芽の上にミズゴケをかぶせて乾燥を防ぎながら、なるべく温度変化の少ない場所に置きます。ミズゴケに包んでポリ袋に入れ、冷蔵庫に保存してもよいでしょう。

冬芽をつくらない北米産のムシトリスミレ類も輸入され栽培されています。これらを越冬させるには温室が必要となりますが夏の管理はむしろずっと容易で、冬期間に開花を楽しむこともできます。

(5) サラセニア、ダーリングトニアの栽培

いずれも北米産でサラセニア科の植物です。サラセニア属には8種があって、太平洋側の東海岸地帯から米国南部に分布しますが、ダーリングトニアは1属1種で、太平洋側の西海岸地帯の一部にしか自生しません。共に葉が筒状の捕虫器具となり立上ります。冬芽を形成して越冬します。栽培法はモウセンゴケとほぼ同じ要領で、腰水にします。なるべく大鉢に植え込み、株分けするときまで2～3年間は植替えしない方がよいのですが、ミズゴケが腐ったりした場合には適時、植替えをします（最近、腐りにくいコンポストが工夫されています）。夏の高温期を避けて、固形肥料など遅効性の肥料を鉢のすみに置いてやります。病害虫に弱いので、なるべく風通しのよい所に置いて、いくぶん鉢の表面が乾きめに保ちます。繁殖法は種子と株分けがありますが、株分けの際、切断面をファイゴンな

どで消毒してやります。また、播種して得た小苗の生長が遅い場合、植替えによって生育を促すこともできます。

ダーリングトニアは、サラセニアに較べて暑さに弱く、東京では夏越しが難しいので北海道で栽培されることが望まれるものです。生ミズゴケに植えて腰水に流水を利用したりして地下部を冷やすように心掛けてやります。

(6) ハエトリグサの栽培

米国の東海岸地帯の一部にのみ自生し、葉が迅速に動き閉じ合わせて虫を捕えることで有名な食虫植物です。今では、組織培養の技術を使って世界の各地で大量に増殖、普及しています。ほぼモウセンゴケと同じ要領で栽培しますが、いくぶん乾きめにする方が安全です。木箱とかカゴに植える人もおります。

ユリ根のような冬芽をつくり越冬します。永年札幌で栽培されている荒井道夫氏によりますと、北海道でさえ戸外で越冬でき、むしろ低温刺激によって大きく生育することです。

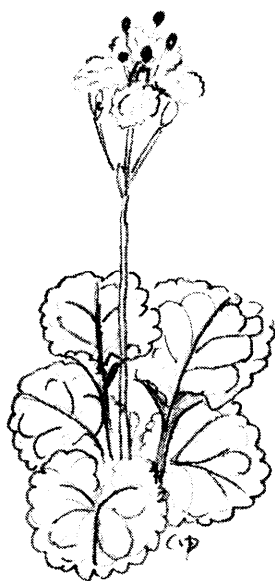
(7) ドロソフィルムの栽培

スペイン、ポルトガル、モロッコに分布するモウセンゴケ科の1属1種です。丈の低いマツ林の間の砂礫地に自生します。乾期にはドライフラワー様に干上ってしまう処で、湿地生のモウセンゴケとは全く生育環境が違います。根が長く伸びるので移植が困難となりますから、播種して発芽し数cmくらいの苗をなるべく大きな深鉢に定植

します。排水をよくするため、桐生砂とか火山灰をコンポストとして使います。そして、鉢が乾かぬ程度に灌水します。2~3年で数十cmの高さとなり開花・結実しますと、間もなく枯れてしまいますから、採種後すぐにとり播きします。この種も北海道では大変栽培し易いようです。

注) 食虫植物研究会監修「食虫植物ふしぎな魅力」誠文堂新光社ガーデンシリーズ 1,400円(1979)

近藤誠宏・勝彦著「食虫植物入手から栽培まで」文研出版 1,600円(1972)などが出版されていますが、栽培法の解説は関東~近畿を基準にして記述されています。



イワイチョウ

図 1

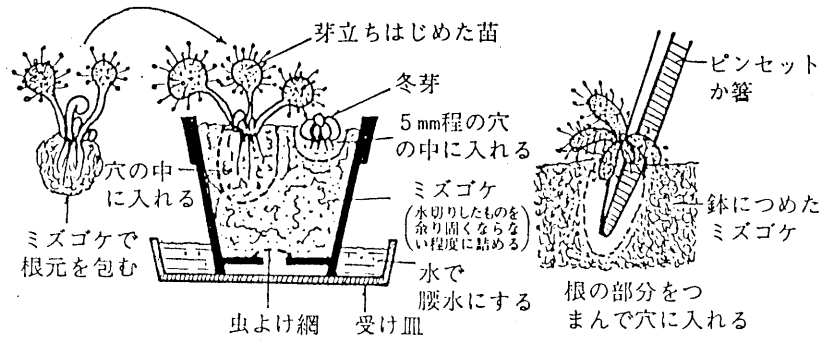


図 2

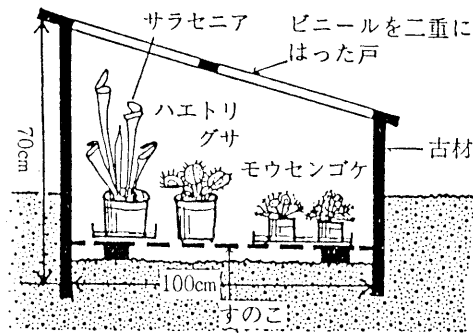


図 3

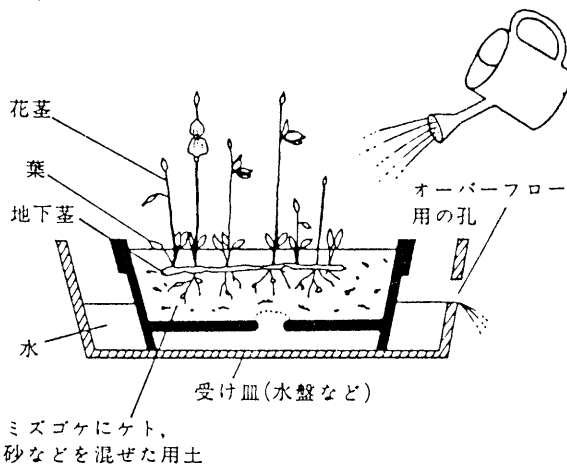


図 4

